

# 素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

9



木乃子増緒

KINOKO MASUO



### ゼングム

「魔族」の青年。  
エルフ族に負けず  
劣らずの超美形。

### アルテ

ルキウスの  
筆頭侍女であり、  
幼馴染であり、  
よき理解者。

### ルキウス

「魔族」の第二王女。  
歌劇団の男役  
トップスターのような  
凛々しさがある。

### ヘスタス

お調子者の鋼鉄イモムシ。  
一応、リザードマンに  
とっての英雄。

### タケル

ひよんなことから  
異世界で「素材採取家」  
となった本作の主人公。  
食えることと  
お風呂が大好き。

### コタロ

犬獣人の王子様。  
岩をも砕く  
強力な爪を持つ。

## 主な登場人物

十　十　十　十　十

みなさん、お元気にしていましたか。

今いちばんやりたいことは、老舗温泉宿での上げ膳据え膳の食っちゃ寝。

贅沢なカニ三昧懷石が食いたい、素材採取家のタケルです。

異世界マデウスに転生しましてね、何不自由なく元気に日々を過ごさせてもらっています。

仕事に不満はない。素材採取をする時は楽しいし、仲間と旅をするのも楽しい。なんやかんやと面倒なこともあるが、概ね満足している。

最近の俺は探査先生や調査先生に頼ることなく、回復薬として使えるエプアラの葉っぱやレア素材の月夜草など、様々な素材を探して採取する技を身に着けたのだ。何百何千と採取していれば、嫌でも覚えるわけだけど。

ギルドから、FからBランクまでの依頼を自由に受けられるFBランクという最良な立場をいただいていることだし、なるべくギルドに貢献できればなと思ってしまふ社畜の性質が。

内心は引きこもってぐうたらしたい自分もいるのだ。だがしかし、なんやかんやと騒動に巻き込まれ、あーだこーだので奔走し、気づくという動き回ってしまう。それに、いつも腹ペコな仲間たちが怪物みたいに腹の虫を豪快に鳴らすおかげで、俺に休日はなかったりする。

街にいる時くらい外食で済ませてほしいのに、俺の作る飯のほうが美味いとかなんとかおだてやがって！　せめて食材の下ごしらえくらい手伝えプニさん！　神様だからって供物を与えられるのが当然だと思ふなよ！

俺の愚痴はともかくだ。

ベルカイムにあるギルド「エウロパ」からの依頼でグラン・リオ大陸の西にあるオゼリフ半島へと小人族のスッスの安否を確かめに行つた俺たち「蒼黒の団」だったが、そこで暴走した古代狼という古代神のひと柱、オゼリフに遭遇。

それであらま大変、なんとかしなくちゃねと地下墳墓から助つ人を召喚、偉そうな墓守リビとドラゴニートの英雄二人、リンデとレザルのおかげでオゼリフを宥めることに成功したのだ。オゼリフは雄々しい巨大狼からちっこい小型わんに生まれ変わってしまったが、それはまあいいことよ。

それよりも、俺たちに最大の試練が待ち構えていたんだ。

いや、俺自身の試練と言つてもいいのかもしれない。

誰一人予想しなかった、予想すらできなかった、まさかの俺・誘拐★

はてさて、蒼黒の団はどうなることやら。  
誘拐されてしまった俺の運命や如何に！

## 1 枯れた地と、乾燥肌に魔素不足

古代馬ホーヴアルプニルがふと感じたのは、風。

乾いた風。

頬を撫ぜるそれが、救いを求めていた。

古代馬であるホーヴアルプニルは神である。マデウスに生けるすべての馬を守護する、尊い神だが闘神のように牙を剥くことはない。ただそこにあるものを見守るだけの存在。  
なんせ己は馬だ。馬の神。

馬は人に寄り添い人を慈しむ。

数百年ぶりに人の姿を借り、人の子と行動を共にするようになった。

金の子の子——プロライトはよく笑い、よく食べる子であった。

蒼の子の子——クレイストンは気高い誇りを胸に抱き、弱き者を救う子であった。

そして黒の子の子——タケルは不思議な力を無限に持ち、目を見張るほど美味しい飯を作る子であった。

ホーヴアルプニルは気に入っていた。数百年ぶりに人の子を愛した。

他者に興味など持たなかった馬の神は、己に新たな世界を見せる人の子たちを守護しようと決

めた。

だがしかし――

「タケツ……ル！ どうしたっ！ 起きぬか！」

「なにをつ……我らに、なにを、したのじゃっ……！」

地べたに這いつくばり、蒼の人の子と金の人の子が苦しうに呼ぶ。

漆黒の何かが空間の歪みより現れ、睡眠の魔法を唱えたのだ。

一瞬にしてその場にいた者たちは眠りに落ち、今はホーヴヴァルプニル、蒼の人の子、金の人の子しか抗っていない。

辺りを取り巻く魔素が濃いため、とてつもない強制力が働いている。抗うことで強烈な苦痛を覚えるというのに、蒼の人の子と金の人の子は必死で眠るまいと叫ぶ。

ホーヴヴァルプニルは闘神ではない。ゆえに、魔素の気配を感知することができてもそれを消すことはできないのだ。抗う術を知らないのだ。

漆黒の何かが昏倒してしまった黒の人の子に近づき、声を発する。

「貴様が魔を統べる者……」

黒の人の子は眠ったまま、漆黒の何かに襟首を掴まれた。

「ビュ……ビュビュ……」

今はまだ弱き竜――ビーは、力に抗おうと懸命に戦っていた。だがしかし、この力に抗うは無謀

というもの。

この力は人知を超えた力。人の子が扱えるものではない。

「我が力に屈せぬとは、貴様は人ではないな」

漆黒の何かが言う。

身体を取り巻く力に抗えぬまま、ホーヴヴァルプニルはわずかに眉根を寄せた。

「人の子をどうするのです」

漆黒の何かに襟首を掴まれたままの黒の人の子は、深い深い眠りに落ちている。いくら膨大な魔力をその身に持ち、無尽蔵に扱うといってもやはり人の子。蒼の人の子と金の人の子がなんとか抗いえたのは、彼らが不意打ちに抗う術を持っていたからだろう。

「その者はわたくしが守護する人の子。お前にその意味がわかりますか」

古の時より生ける神、古代の名を持つ己の守護を抱く人の子。それを害しようというのなら、喧嘩を売られたのも同じである。

「我が尊き神に捧げるのだ。失われし安寧の時を取り戻すため」

漆黒の何かがそう言うて術を唱えると、黒の人の子の身体がゆっくりと宙に浮かぶ。

これはいけない。このままではいけない。

心は強く叫ぶのに、ホーヴヴァルプニルは指一つ動かすことができない。

嫌な、力だ。

この力には覚えがある。

「アンタは……」  
「古代竜……」

すべてを魅了し、すべてを従わせ、すべてを統べる存在。  
ホーヴアルプニルの咬きは乾いた風に乗り、静かに消えた。  
漆黒の何かが歪みの向こうに消え去るまで。  
ただ見ているしかなかった。

+++++

——おotto？ この展開は予想していなかったな

——言うておくが、僕ではないよ。お前の言う通り、僕は手を出してはいない

——ふうん。まったく信用できないけど、今回に限ってはそうなんだろうね。君がはるか昔に蒔いた種が、今頃芽吹いただけだろうよ

——どうなるのかな。面白いね

——楽しんでるんじゃないよ。僕の加護があっても、あの地はいけない。あの地だけは、いけ

ないのに

——見守るしかないのだろう？

——見守るしかないんだ

——見守ろう

+++++

「ふふあああっ!!」

目を覚ましたら真っ暗で、顔面に何かがあって息苦しくて、手足をばたばたさせたらそれが地面  
ぽいものとわかり、えいやつと顔を上げた。

「ぺべっ、なんだどうした！ 何があっただうなったの！」

口に入った砂を吐き出しながらビーを探したが、いない。クレイも、いない。プロライトも、  
いない。プニさん……いない。

スッスもオグル族のググも村の皆も、どこにもいない。

それどころか、ここはどこだ。緑あふれる優しい光が注ぐ森で「王様の眉」と呼ばれるオゼリフ

に自生する苔の採取予定だったのに、どういうことだ。

這いつくばって呆然と辺りを見回す俺の目には、緑が一切ない。乾いた風が乾いた草をいたずらに揺らす、枯渇した大地。ごつごつとした岩がどこまでも続く、不毛の土地。

「あいたたた……こりゃどっから落ちたな。腹が痛い」

ゆっくりと上体を起こすと、腹と膝に痛みを覚えた。強く打ちつけたか何かで、鈍い痛みが続く。……おかしいな。俺の身体はやたらと頑丈だから、高いところから落ちたとしてもそれほど痛みを感じないはず。それなのに、こんなに痛みが続くなんて。

マデウスに来て初めてじゃないか？ 何かの衝撃を受けたせいで、身体が痛くて動かすのが辛いだなんて。

灰色の分厚い雲が空を覆い、時折ごろごろと稲光をまとう。天気悪いな。雨が降るのか？

「ビー？ おーい、ビー」

ぼっこりお腹の小さなドラゴンを呼ぶが、応えない。

どれだけ離れていようとも、どの方向にビーがいるのかはなんとなくわかるものだけど。

「クレーイ、おっさーん」

蒼い巨体の戦国武士、いつまでも寝ているなどすぐに頭を叩くせに、あの鋼鉄の拳が飛んでこない。

「プロライトー？ カニ雑炊作るぞー」

やばい。来ないじゃないか。あの食いしん坊エルフ、この言葉で呼べば一瞬で駆けつけるはずな

のに。

「プニさーん！ サーペントウルフのスパイシーから揚げはどうでーすかー！」

応えない。

どんな肉だろうとから揚げ大好きな馬の神様が、キノコグミもつけるのですよ、って言ってくれない。

どうしてだ。

どうして。

どうして、誰もいないんだ。

おかしい。明らかに、おかしい。それは理解している。何かが俺にあったか、皆に何かがあったか。

こんな時でも俺の恐怖耐性が——あんまり働いてくれないな。ただ、心臓がすっげえばくばくいつてる。ビーの親であるボルさんに逢った時以来の動揺だ。どういうこっちゃ。

誰もいなくて知らない場所で、たった独りで。

「おーいっ！」

俺の声に応える者は、ない。ただ赤茶けた岩の大地だけが、渴いた風を運ぶだけ。乾いた風。

そうだ、何か嫌だなと思ったら、この場所が嫌なんだ。

なんて言えればいいんだ？ ええっと、息苦しい……いや違うな。エルフの郷ほどの苦しさは感じ

ない。あの時感じた猛烈な湿気はもうごめんだ。

「湿気……」

ふと口に出した言葉に頷く。

湿気だ。ここには湿気を感じられないんだ。

真冬の空気。数日間雨が降っていない、冬の空気。

寒くないけど、あんな感じ。乾燥しているんだ。

「俺が感じる湿気は、つまりが魔素濃度って言っていたな。魔素が濃いぶん、湿気も強く感じると」

濃すぎる魔素が身体に害を及ぼすということは知っている。逆に、魔素がないと生きていけないとも。

「えっ」

湿気を感じられない、ということは。

魔素が、ない??

「えっえっ」

魔素がないということは、俺って死ぬの? いやでも死ぬような苦しさはない。打ちつけた腹と膝はまだじんじんと痛むが、耐えられないわけではない。そのうち消える痛みだ。今すぐに死ぬってわけじゃないだろう。

俺の勘はとても良い。俺がそうじゃないだろうと思ったことは、大体当たる。

よし、落ち着け。今すぐ死ぬわけじゃない。魔素がないってのは驚きだが、ここはマデウス。灰色雲に見え隠れする太陽の影、あの太陽は土星型。空に鳥が一匹も飛んでいないのが気になる程度で、ここはマデウスだ。

「ふー……」

どんな時でも慌てるな。クレイが言っていた。慌てて行動しても、悪いほうへ転がるだけ。今すぐに危険が迫っているわけではないのなら、落ち着けと。

びっくりするほど魔素がない場所に転移したか、連れてこられたか。だけど連れてきた人はいない。俺ひとり。皆の安否が気になるが、逆に冒険者経験の浅い俺がいなくなったことのほうが、皆にとつて不安だろう。

「そうだ、鞆……!」

なかったー!

ちょうど採取に行く用意をしていて、鞆の整理をしていたところだったー! 醤油が切れていたんだー!

「ええっと、ええっと、何か持っているもの、持っているもの」

ほぼすべてを鞆の中に入れて行動しているから、身に着けているものなんてわずか。

すぐに採取ができるよう、グルサス親方特製の採取道具は腰に装着していた。よし、ミスリル魔鉱石で造られたハサミをはじめ、採取道具は万全だ。

いつも着ているローブは……ビーの寝床にしたままだった。涙と鼻水と涎とあれこれで汚くなっ

たロープを着たいとは思わないが、なければならぬ不安になる。あのロープは優秀だったからな。俺に暑さ寒さをあまり感じさせない、布団ふとんにもなるロープ。

ロープはない、と。

「ほかには何か……」

ズボンの後ろポケットに手を突っ込むと、手に当たる硬いもの。

それを掴つかんで取り出して、喜び勇んで見てみれば。

「これは………なかったことに」

琥珀石こはくせきの召喚媒体しょうかんたい。

緑の精霊王を呼び出すための魔石だった。

鞆を整理していた時に、プニさんに甘いものが欲しいと強請ねだられて鞆を探り、そういえば最近呼んでいないなどこの石を取り出したんだ。だけどプニさんが一瞬で不機嫌顔になったから、石を隠すためポケットにねじ込んで。

今の状況を説明してもらいたいけど、あれを呼ぶのもなあ。ちよつとなあ。いやだばかんこんなとこ嫌よ。ふんふん、とか膨れそうで超めんどうかい。

暴れて怒る緑の魔人を想像し、知らずに笑っていた。

そうだ、俺はまだ笑える。

笑える余裕があるんだ。

それなら、きつと大丈夫。

周りに頼れる人は誰もいない。ずっとずっと一緒だった相棒あいつすら、いない。だけど俺は生きている。

マデウスに來た時に戻っただけだ。場所が違うだけ。鞆とロープがないだけ。

生きているのなら、生き続けなと。

「もーしもーしドリーユアースリベルアーリナー」

琥珀石に向かつて小さな声で呼びかける。

限りなく小さな声で呼んでみるが、琥珀石はウンともスンとも言わない。いつもなら手にしただけで淡く光り、早く呼べと震えるのに。

緑の魔人も、呼べない。

何故かはわからないが、この乾いた大地と関連しているのかもしれない。緑がない場所になんか行きたくないわよう、とか言いそうだ。

それならポケットに戻すだけ。ただの石に用はない。

わずかな期待があったが、無理なら無理でいい。

さて、お次は。

——…もつと

初めて來た土地だな。なんていうところなんだろう。

そもそもここはアルツェリオ王国内なんだろうか。なんだか空気が違う気がするんだよな。

……もつと、よこせ

あれだな。外国の空気を吸ったような気分だ。

海外旅行で飛行機を降りて、空港内で感じたエキゾチックな匂い。肌で感じる、異国情緒。

俺はなんらかの事情で連れてこられたんだな。もしかしたら蒼黒の団全員がバラバラになっているかもしれないが、個々がありえないくらい強いし、サバイバル知識も豊富だ。なんとかなるだろう。

あ！

そうさそうさ！

気づくのが遅かった！

偉大なる探査先生と調査先生にお尋ねすればいいんだった！

いやだなー、なんですぐに気がつかないのかなー、あははー。

「さーてさてさて、いきますよー」

独りになると独り言が増えるが、それは致し方ない。寂しさを紛らわすためなんだから仕方がない。

まずはこの場所を知ろう。特定のことを調査して、それがどこ産になるのか調べればいいんだ。

メイドイン何某がわかれば、今いる場所がわかる。

魔力を高めるユグドラシルの杖すらないが、まあいけるだろう。

「そこらへんの岩でいいか。先生、この岩はどこ産ですか。調……ッ」

目の前の岩を目掛けて意識を集中すると、身体じゅうからこっそりと何かが抜け出た。

「うあつ？ んごふっ！ 痛っ！」

膝から力が抜け落ち、地面に顔面が叩きつけられる。

柔らかな砂地だったから良かったものの、尖った岩の上だったら俺死んでたよ！

それよりなにこれなにこれ、意味がわからない。調査しただけで、全身の魔素が流れ出た！

魔素の流れくらいわかる。俺の血みたいなものだからな。それが、ぶわっと吸い出されたような。

### 【トロブセラ溶岩石 ランクF】

トロブセラ火山が噴火したさい飛び出た溶岩。建築素材として使われることがある。聖

なる山の血潮とも呼ばれ、魔族にとっては有難い代物。

はいー？

いやいやいやいや、これが溶岩だったことはわかるんだよ！ 特徴のあるぽつぽつした赤茶色の

岩は、富士山の樹海でよく目にした岩。

分厚い雲に隠れてはいるが、きつと俺の真後ろにあるだろう山が過去に噴火した証。あの山がト

ロブセラって呼ばれている山なんだな。うんうん。だけど、トロブセラってどこ地方にある山よ！  
そんなことよりも！

「ま、ぞく……？」

喋るのも億劫だ。仕事で多忙を極めた年末、三日間徹夜した日の夕方くらいに気がある。頭がクラクラして、一歩も動きたくなくて、だけど洗濯をしないと明日穿くばんつがない、って日岩を調べても場所まではわからないのか。それじゃあ、トロブセラはどこにある山なんです、って聞かないと。

調査<sup>スキャン</sup>だけでこんなにフラフラになるってことは、やっぱりこちら辺には魔素がないということだな。俺自身が蓄<sup>たくわ</sup>えていた魔素がごっそり持っていけなかった感覚。ビーの卵を孵化<sup>ふか</sup>させた時の、あの感覚だ。やだこれ。

魔族って。

魔族って何。

魔族って、まさか魔族？ いや魔族がなんなのかよくわかんないんだけど。

魔族って確か、うすらばんやりと覚えている俺の記憶の彼方<sup>かなた</sup>によると、確か……北の、ナントカ大陸に住んでいるという？

俺の背中に更なる冷や汗がだらりと流れるのを感じると、髪の毛がさもさと動き出した。

この感覚は虫か？？ 大型ナメクジは平気だが、昆虫は苦手なんだよ。

「くっそ……こんな、時にっ……」

重い腕を上げ、髪を手で払おうとしたら。

「おうっ、おうおうっ、早いところ起きやがれっ」

甲高<sup>かんだか</sup>い声が聞こえた。

「えっ？」

独りなの<sup>げんぢよう</sup>が心細くて、とうとう幻聴<sup>げんぢよう</sup>がしはじめたのかなと目をぎゅっと瞑<sup>つむ</sup>り、ばちっと開く。

「おもてーんだよっ！ テメーの頭っ！」

幻聴じゃない。確かに聞こえる。

俺の、頭の、髪の毛の中から。

どうしよう、俺の魂が抜け出て具現化して多重人格はじめました、みたいなことになっていたらトンデモマデウスなんでもアリだこのやろう。

震える手で頭に触れ、恐る恐る髪の毛を掻き分け――

指先に触れる何か。

その何かはとても冷たくて、硬くて。

「強く掴むなよ！ いいな！」

甲高い声がそう叫びながら、俺の、指を、掴み？？

俺は、どういふことなのと硬いそれを手のひらに収め、それを眼前に。

「ふはあっ！ やっと話せるぜ！」

俺の手のひらの中にあつたものは、鋼鉄のイモムシ。

ちっちゃな手足がついた、大きな目が特徴の。

地下墳墓で留守番をしているはずの、リザードマンの英雄の。

「おうタケルッ！ 元氣か？」

ヘスタス・ペイルーユの仮の姿――

手のひらに乗る大きさのイモムシには、小さな手足がついている。いくつかの珍しい魔鉱石と魔素水をブレンドさせ加工した特別製のイモムシ。

俺が地下墳墓で強制労働……じゃない、善意の協力のもと機械人形を修復した時のこと。

伝説のドラゴニートであるリンデルトヴァウムの身体を徹底的に直したさい、墓守であるリビルガンデ・ララに他の壊れた機械人形たちも全部直してくれ、直せるんではよアンタなら、ほら直しなさいよ早くと頼まれ、全力を出して直してやったのだ。

まずは機械人形の核であるイモムシ電池――俺は鋼鉄イモムシと呼んでいる――を改良。より魔素を取り込み蓄積できるよう、ミスリル魔鉱石と各種鉱石で補強し、本体である機械人形には宝物庫に転がっていた貴重な鉱石らを使い、魔素水をぶちまけて柔軟かつ頑丈に仕上げた。

機械人形は定期的に充電のようなものをし、数時間動かずじっとしていなければならないのだが、急襲されたらどうすんだろと考え、思いついたのが魔素を自動で吸収するこの鋼鉄イモムシだ。しかも省エネ。ほんのわずかな魔素でも吸収して動けるようになれば、鋼鉄イモムシだけでも逃げることができる。

機械人形の核は何よりも大切にしなければならぬ。魂そのものなのだから。そこところが

一番大事なんだからね、と。何故カリピに怒鳴られながら作業したよいおもいで。

それはさておき、その鋼鉄イモムシが俺の手の中で蠢いている。元気いっぱい。

さつきから、よこせだとかなんとか変な声がしてたような気がしていたんだが、こいつが犯人だったか。

「俺だけ留守番なんてひでえことしやがって！ 俺だって外に出たかったんだぞ！」

「……ええはいそうでしたねー」

「置いていかれた連中の愚痴を俺が全部聞いたんだ！ 俺が独りで！ ふざけんなっての！」

「……はいはいごめんねごめんねー」

「やつと外に出られたと思っただけなんだよここ！ 魔素がねえ！ 空が暗え！ なんか臭え！」

冷たいイモムシが俺の手の中から逃げ出そうと、右に左にうごご暴れ、次から次に文句が出る出る。

暴走した古代狼対策のため俺が地下墳墓から召喚したのは、リビとリンデだけのはずだったドラゴニートの英雄であり魔王クレイと良い勝負ができるリンデ。彼一人でじゅうぶんだったのだが、何故かもう一人の英雄レザルもついて来た。

だがしかし、おかげで古代狼を疲れさせ、他の暴走モンスターたちも一掃することができた。これでヘスタスまでついて来たら、主にクレイの精神が持たなかっただろう。

「でも風があるな！ 臭えけど！ あはははっ！」

ぐねぐねと蠢き、大笑いをするヘスタスは、とてもリザードマンの間で語り継がれる勇者ヘスタ

スとは思えなかった。

リザードマンが伝説の勇者と謳う、ヘスタス・ベイルーユ。彼が竜騎士を目指していたから、クレイも竜騎士を目標としたらしいのだが。

伝説の勇者の本性は残念なお調子者だったなんて、クレイが知ったらどう思うか。俺だったら嘆く。

「ところでタケル、お前なに伸びてんだ？」

鋼鉄イモムシであるヘスタスはひとしきり笑ったところで、やっと俺の状態に気がついてくれた。拘束するのも面倒だと俺が手の力を緩めれば、イモムシはぐねぐねもぞもぞと動いて俺の頭上へ。何故ここにヘスタスがいるのか、考えるのはあとにしよう。

考えるのも疲れる。酷い頭痛だ。

「魔素が、足り、ない」

なんとか喋ることができるようになり、ゆっくりと瞬きを繰り返す。

全身から力を抜いて静かに呼吸を繰り返せば、次第に力が戻ってくる。今回は意識を失わなかっただけマシだ。こんなだっ広い何もないところで無防備になれば、獐猛なモンスターにさあさ食い殺してくださいと言っているようなもの。いや、今は実際に無防備なんだけども。

「それな。魔素な。やべえくれえ少ねえな。なんでだろうな？ でもよ、俺はお前の魔力を吸ってから動けるようになったぞ！」

「……どゆこと？」

「初めはな、動けなかったんだ。お前が直した俺が動けなくなるなんて、ありえないよな？ でもな、動けなかったんだよ」

そもそもヘスタスはどうやってここに来たのか。

ヘスタスが言うには――

地下墳墓の最奥にあるミスリル魔鉱石で造った魔素発生装置、あそこに設置していた転移門が開いた。ヘスタスは悪知恵を働かせ、リピたちが帰還するのと同時に転移門に飛び込み、外に出ようとした。だが、機械人形の身体は巨大すぎてすぐにバレル。それだったら核である鋼鉄イモムシのまま外に出ればいいじゃない、ということ飛び出た、とのことだった。

勝手に地下墳墓の外に出てこんな辺鄙なところに来て、こりゃヘスタスはリピに叱られるな。墓守であるリピの言うことを守れなかったのだから、説教だけじゃ済まないかも。百年間イモムシのままでいろ、とか言いそう。

「それで、やっと外に出られたと思ったら魔族の気配がしたろ？ その時にごっそりと魔素を持っていかれちゃってさ」

「魔族の気配？」

「アイツらの気配は独特だからな。嫌味か、つつうくれえ主張しやがる」

「その魔族に、魔素を……持っていかれた？」

「ああ。周りの連中も魔素を抜かれてたな」

「魔族ってそんなことできるの？」

「詳しくは知らねえけど、魔族だからな。魔力を巧みに操る一族だ。何をしやがるかわかったもんじゃねえ」  
うん??

ヘスタスの言葉に引かかる。

「魔族って、魔力を巧みに操る一族のこと？」

「ああん? ほかに魔族はいねえだろう」  
えっえっ。

なにそれ。

俺が考えていた魔族って、サタンとかベルゼバブとか、そういう邪悪な世界の住人のことかと。まさか「魔力を巧みに操る一族」を省略して「魔族」と呼んでるだなんて、想像もしなかった。なんとか落ち着いてきた呼吸と腹の痛み、ぐるぐるとしていた思考も戻ってきたようだ。もう一度落ち着いて辺りを見回す。

灰色の空。乾いた空気。赤茶色の大地。分厚い雲に山の頂上が隠れていた。時々遠くから雷の音が聞こえる。どこかで見たことのある光景だなと記憶をたどれば、ハワイ島のキラウエア火山を思い出した。

そうか。あの山は活火山で、あの空は火山雲で覆われているのか。ともすれば、雷の音だと思っていたのは火山雷と。

マデウスに来てから活火山を見たのは初めてだな。

「ところでヘスタス、なんで最初から出てこなかったんだ。俺が意識を失っていた時もいたんだろ? ここに」

「それがよ、お前がさつき魔法を使つたろ? その時にぶちかました大量の魔力を、俺がいただいたってわけだ」

「ふー、やれやれよっこいしょ。それで動けるようになったのか」

「そうだ」

腕に力を入れて上体を起こし、ゆっくりと座る。よし、どこも痛くない。

魔力がないと思っていた乾いた大地でも、ほんのわずかな魔力が漂っていたらしい。治りはいつもより格段に遅いが、痛みが延々と続かなくて良かった。

俺も鋼鉄イモムシのように魔力を多く吸収できる体質なんだけど、普通の人間ってそんなことできるのか? なんて考えてはいけない。聞いたことはないが、できるもんはできる。それでいい。

乾いた大地の上で胡坐をかき、落ち着いて深呼吸。ヘスタスが臭いと言っていたが、特に気になる匂いはいなかった。あるとすれば、独特の硫黄の匂いかな。

喉の渴きを覚え、つい鞆を探してしまう。常に傍らにあった鞆だけど、あれは俺を転生させた「青年」にもらった魔道具の一種。魔力を糧とし、俺の魔力によつて維持されていた。盗まれても即座に戻ってきたとお利口な鞆だが、今この場がないということとは――

俺がいる場所の魔力が薄くて魔力が足りないから、鞆の機能を発揮できないということだろうか。鼻くそ程度の魔力しか漂っていねえってのに、もう動けるのか? 相変わらずヘンテコな身体し

やがって」

「薄い魔素を鼻くそにたとえるな。なあなあへスタス、こんなにも魔素がうつつい土地ってほかにもある？」

「何百年か前のことならわかるぜ？ そんな時は聞いたこともなかったな」  
そうでした。

ついつい聞いてしまったが、へスタスは大昔に亡くなっていたんだ。今こうして存在しているのは、俺が機械人形として生き返らせたからに過ぎない。

へスタスは俺の頭の上を動き回り、髪の毛の中に潜り込みながら続けた。

「こんな乾いた土地なんざ、なんも生きられねえだろうよ」

数百年前に亡くなり、数百年間地下墳墓から出なかったへスタスだ。マデウスの大地がどう変動したのかなんて、彼がわかるわけもないが、滞在期間わずか一年弱の俺が知るよしもない。

ああでも。

「トロ……トロブ？ セロ？ トロブ、セロ火山って聞いたことある？」

死にそうな目にはあったが、せっかく調査先生が教えてくれた情報だ。たとえへスタスに心当たりがなくても、なんらかの情報に繋がるかもしれない。

へスタスはしばらく沈黙すると、小さな手で俺の髪の毛を数本引つ張った。地味に痛い。

「トロブセロ？……トロブ……トロブセラ、だろうそれ。あれだ。神が棲んでいるってえ言われている山だ。船で行くことができない、誰も寄りつかない謎の大陸」

「謎の大陸……なんだそれ。この石がトロブセラ？ 溶岩石。魔族にとっては有難い代物なんだって」

「ああ！ ああ、ああ、ああ！ それか！ 魔族な！ そうだったそうだった！ トロブセラは北の大陸であるパゴニ・サマクにあるはずだ。俺が生きていた時には爆発したって話は聞いてねえから……」

俺が死んでから爆発したんだな、と。へスタスは興奮して俺の髪の毛の中を這いずり回り、ゲラゲラと笑った。

「気持ち悪いからそこで暴れるなって」

「おいこらタケル！ 気づけよ！ 俺たちは北の大陸にいるんだぞ！ 俺が生きていた頃は、大陸を渡るだなんて考えもしなかった！ できなかった！ はははっ、すげえ！ 俺は！ 今！ グラ・リオよりもずっとずっと彼方にあった海の向こうにいるんだ！」

鋼鉄よりも硬いミックス魔鉱石の身体であることを忘れたへスタスは、容赦なく俺の頭の上で飛び跳ねる。俺の毛根と頭皮がととても心配だが、へスタスの興奮も理解できた。

いきなりこんな場所に連れてこられ、仲間たちと離され、訳もわからず放置されたけれど、俺たちは北の大陸——パゴニ・サマクにいるんだ。

クレイさえも来たことがない未知の世界。元冒険者で今はトルミ村雑貨屋のおっさんジェロムや、ベルカイムのギルド「エウロパ」の元Aランク冒険者のギルドマスターである巨人族のおっさんすらも、北の大陸には行ったことがないと言っていた。いやむしろ行く手段がないというか、北の大

陸に行くまでの海路がとても危険で命を賭してまで行くところではないと言われてはいたが。そんな場所に俺たちはいるわけだ。

「おら、立てタケル！　こんな、なんもねえところでグズグズしてんじゃねえよ！　何があるかはわかんねえけど、きつと何かあるに違えねえ！」

そうだよな。うん。

何があるかはわからない。だが、こんなところで呆けている場合でもない。それならまず水を探そう。喉が渴いた。

便利な鞆がない。頼れる仲間もない。だけど、俺は生きている。

生きているならなんとかなる。俺はそうして生きてきた。

きつと大丈夫だ。俺は簡単に死なない。

「よし、行くぞヘスタス。誰も寄りつかなかった北の大陸の素材だ。珍しいものがたくさんあるに違いない」

「おおそうだ！　金目のモンがゴロゴロあるだろうぜ！」

北の大陸は未知の大陸。ということは、この地にあるものは低ランクであったとしても、ほかの大陸には出回らない希少価値が高いものばかり。もしもこの溶岩石をアルツェリオ王国の王都に持ち込んだら、珍しい石ということで貴族たちは先を競って欲しがるんじゃないか？

そうになったら、蒼黒の団の食費が稼げる。

それだけじゃない、トルミ村の更なる発展の費用に充てられるし、王都で俺たちが流行らせた握

り飯弁当の店舗を全国展開させることも夢じゃない。ああそうだ、小人族とオグル族が住む合同村に風呂を設置しないと。エルフたちの力を借りて、ドワーフたちは酒で釣って……

「ふひ。ふひひつ」

「おおつ？　お前、なんか腹の黒いこと考えていやがるな？　へへへつ、その意気だ！」

俺の頭上で飛び跳ねる鋼鉄イモムシに誘われるまま、山に向かって歩くことにした。

## 2 その頃、蒼黒の団は1

「ピュイイイ……ピュイイイ……」

「いい加減に泣くのをやめなさい、鬱陶しい」

「ピュイ！　ピュイツ！」

「いくら泣き叫んだところでタケルは戻りません。魔族に勾引かされたのですから」

東大陸グラン・リオの最西に位置する半島、オゼリフ。

その半島の中央に広がる深い森、通称「王様の森」にある小人族とオグル族が住まう合同村で、泣き叫ぶ小さな黒い竜ビーと、不愉快そうに眉根を寄せる白銀髪的美女ホーヴヴァルプニルが口論を続けていた。

先ほどまで笑顔で採取の支度をしていた素材採取家、タケルが何者かに連れ去られたのだ。

これには誰もが震撼した。

突然強烈な眠気が襲ってきたと思ったら、村の大恩人でもあるタケルが消えていた。はじめは何が起きたのかわからず、どんな魔法を使ったのだと面白がっていた小人族だったが、ビーの狼狽と嘆きを目にし、これはビックリドッキリショーなどではないと焦った。

小さな犬になってしまった古代狼は、強烈な魔力に逆らえず現在も安眠中である。無理に抗おうとすれば、魂をすり減らし今度こそ消滅の危機である——と、古代馬が言った。

こうした事態に、チーム「蒼黒の団」のリーダーであり、唯一の常識人とも呼ばれているドラゴニユートのクレイストンは、大地に拳を叩きつけて己の失態を恥じた。

「くそ……！俺が傍にいながら、なんたることだ！」

「クレイストン、そう己を責めるな。わたしも彼奴の魔法に抗うことはできなかったのじゃ。わたしは曲がりなりにもハイエルフじゃぞ？そのわたしすら……」

大地がひび割れるほどに拳を振り下ろすクレイストンを宥めたのは、ハイエルフ族のプロライト。ハイエルフはドラゴニユートであるクレイストンよりも魔力が高く、また魔力に対抗する力も強い種族である。不意を突かれたとはいえ、ハイエルフの魔力を凌駕する種族が存在するとは思えなかった。

膨大な魔力を操るタケルは別格だ。アレは、人間であるかすら怪しい。それにもかかわらず、呆気なく連れ去られてしまった。

「ブ二殿、タケルを連れ去ったのは確かに魔族なのか？」

クレイストンは切り株に座っていたホーヴヴァルプニルに問うと、ホーヴヴァルプニルは不愉快そうに、口惜しそうに深く頷いた。

「……確かに魔力を巧みに操る一族の気配がしました。それは、間違いありません」

魔族。

ホーヴヴァルプニルの言葉に、その場で話を聞いていた一同は顔色を変えた。

しばらく沈黙が続いたあと、恐る恐る口を開いたのは小人族のスッスであった。

「魔族って、アレっすよね。北の大陸にいる、恐ろしい種族っすよね」

「正直、俺は魔族に出会ったことがないの。ゆえに、恐ろしいのか否かはわからぬ」

「栄誉の旦那も見たことがないんすか？」

各地を旅して回った「栄誉の竜王」の二つ名をいただくクレイストンすら、出会ったことのない種族。そんな謎の種族が、どうしてタケルを連れ去ったのだらうか。

「彼奴が使ったのは空間術じゃろう。タケルが得意とする、転移門のような」

「すまんプロライト、俺はそこまで詳細に記憶しておらんだ」

「わたしとブ二殿とビーだけが最後まで覚醒しておったからな。そこは仕方がない。あれほどの魔力、わたしの母ですら抗うことはできぬ」

プロライトの母——ハイエルフの王女が抗うことのできない魔力。

そんな常識外の魔力を持つ者が、タケル以外にも存在するとは。

再び言葉を失ってしまった彼らに、ビーが叫ぶ。

「ピュイ！ ピュピュー！ ピュイッ！ ピュ！」

「すまぬビー、タケルがおらめとお前の言葉がわからぬのだ」

「ピュイ！ ピュピュー！」

クレイストンが宥めようとするも、ビーが何かを訴えようとタケルの鞆を叩いている。

そういえば、この鞆はタケルが持つ異能<sup>ギフト</sup>によって存在を成していると聞かされていた。タケル自身も鞆について詳しいことはわからないらしいが、「私物確保<sup>ギフト</sup>」という異能が働いていると皆に伝えていた。

それならば、鞆はタケルと共にあるべきなのだが。

「鞆がここに残されているということは……どういふことなのじゃ？」

「いや、俺に問われてもわからぬ」

ブロライトとクレイストンは互いに首を傾げた。

「ピュイイ……ピュイイイ……」

ビーは大きな目に大粒の涙を浮かべ、肩を震わせ泣き続ける。そして、不貞腐れたままのホーヴヴァルプニルをじとりと睨<sup>にら</sup>んだ。

「言葉を発することのできぬ未熟な己を恨むのです。そもそもお前は古代竜<sup>ドラゴン</sup>であるというのに、魂の成長が遅すぎます。ヴォルディアスの加護を受けしあの者に甘えすぎているではありませんか」

「ピュイ！ ピュューイッ！」

「むっ、誰が甘えているのですか！ わたくしは人の子に甘えたことなど一度も……」

「ピュピュピュー」

「それとこれとは話が別です！ わたくしはより良い供物を求めているに過ぎません！」

「ピュ！ ピュピュー？ ピュッピュピュイイ」

「ハッ！ ……それもそうです。どうして気づくことができなかったのでしょうか。あの者がおらねば、わたくしはじゃがバターそうゆーを食べられぬではありませんか！」

ビーの言葉はホーヴヴァルプニル以外誰も理解できなかったが、二人の口論を聞くことでなんとなく察することができた。

つまり、タケルがいなければ美味しい飯を食えないぞと、ビーがホーヴヴァルプニルを脅<sup>おど</sup>したらしい。

くだらない口論だが、「美味しい飯を食う」というのがチーム蒼黒の団最大の目標であり、その最大の目的が根底から崩壊してしまったのだ。

ブロライトとクレイストンはタケルが作る素晴らしい料理の数々に慣れ、今ではタケルと出会う前に食べていた冒険者御用<sup>ごようたし</sup>達である保存食、硬い干し肉とすっぱい葡萄酒<sup>ぶどうしゅ</sup>を嫌悪するほどになっている。

あの優秀すぎる素材採取家であり、蒼黒の団唯一の料理人であるタケルがいなくては、美味しい飯を食うことができない。美味しい飯はトルミ村やベルカイムにもあるが、そもそもタケルがいなくては空間術を使うことができない。となると、しばらくは美味しい飯を食うことができないのだ。

団員の心は一つとなった。

「人の子たちよ！ わたくしの供物を！ とびきりの供物をよこすあの者を捜すのです！」

「ビューー！」

「クレイストン！ 今すぐにもタケルを捜しに行くのじゃ！」

「当たり前だ！ 魔族の住処を探すのだろう？ それならば、北の大陸に赴かねばならぬぞ！ ブ  
ロライト、旅支度だ！」

素材採取家であるタケルの仲間たちは、拳を高々と突き上げ次の目的地を目指すことになった。

### 3 原住民は、白いもじやもじや

「はっ！ ビーが鼻汁噴射させながら号泣している気がする！」

「なんだそれ面白えな」

ふと感じたビーの泣き声。

あのちびっこ竜、俺がいなくなつて慌てていないだろうか。いや、きっと慌てている。泣き叫んでいるだろう。

ビーは古代竜の子供ではあるが、精神は人間の子供と変わりが無い。不安になったり寂しくなったり眠くなったりすると、ぐずる。拗ねる。

何かしらの食べ物を与えれば大人しくなるが、さてどうしているだろうか。

プニさんと喧嘩しているんだろうなあ。くっだらな言い合つて、クレイに迷惑をかけているんだろうなあ。

……俺が戻つたら全員から文句を言われそうだ。俺、被害者なのに。

「あつとうい……」

行けども行けども、乾いた大地。

カラカラの風にカラカラの砂が空を舞い、容赦なく俺の目玉に飛び込んでくる。

目薬欲しい。キーンと、キターとなる、ハードな目薬が欲しい。

せめて顔を洗いたい。水に顔面を入れて瞬きをすれば、ゴロゴロとした不快な眼球を洗えるはず。それから汗を拭きたい。その前に水が飲みたい。できれば冷えたやつ。

冷えているのなら冷えた酒が飲みたい。氷を入れたリザードマン特製の潤酒が飲みたい。温泉に浸かりながら雪見酒でキュッと一杯……

「おおうい、タケル！ こんなところで寝ぼけんじゃねえよ！ オラ、歩け歩けっ！」

鋼鉄イモムシが俺の頭の上でがちゃがちゃとやかましく跳ね飛び、俺を夢の世界から現実へと叩き落とす。

少しくらい白昼夢を見てもいいじゃないか。歩いても歩いても歩いても、砂と岩とごろごろした溶岩ばかりなんだから。

俺は重たい身体をなんとか動かし、トロブセラ火山の麓を目指している。

火山に近づくなんて危険かもしれないが、なんとなく身体の方かうほうへ歩いていたら、それが火山の麓だったわけ。

知らない土地に頼れる仲間はいない。それならば自分の勘を信じよう。

マデウスに来てから道に迷ったことは一度もないのだ。ベルカインにある迷路のような職人街でも、迷ったことがない。方向音痴は冒険者として命取りだからな。前世ではスマホのナビに頼りきっていました。

「なあヘスタス。お前が知っている限りでいいから、魔族について教えてくれ」

頭上ではしゃぐヘスタスに聞くと、ヘスタスは飛び跳ねながら俺の肩へと着地。

「うーんとな、俺もレザルから聞いた話だからな？ 魔族は生活のほぼすべてを魔力に頼っているらしいな。何をするにも魔法を使うから、簡素な生活を好むとかなんとか。それで、魔族が住む国のことを魔族の世界って呼んでいたらいいんだ」

それって略して魔界まかい。

あれかな。帯ほろもにまたがった魔女が逃亡者を石に変えたりするのかな。帰らずの原とかあるのかな。おどろおどろしい世界だったらどうするかな。食人習慣なんてあったらどうしよう。俺、絶対におかしくなる。

「魔族っていうのは……見た目は？ クレイの顔とどっちが怖い？」

クレイの顔をやっと思われてきたんだ。あれを超える怖い見た目だったら逃げ出す自信がある。

「見た目なんか知らねえよ。俺はヴォロガの戦いに参加した時、遠目で確認できた程度で、魔力が

やたらと多い種族だなーと思っただけだ」

ですよー。

ヘスタスの返答に肩を落とし、それでも歩みは止めない。

今は朝なのか昼なのか夕方なのか、時間の感覚がまったくわからないな。曇天どんてんに走る稲光をぼんやりと眺めつつ、こんな不毛の大地に住んでいる魔族がどこにいるのか考える。

生活のほぼすべてを魔力頼りにしているということは、魔素の薄いこの土地でどうやって生活しているのだろうか。水があればなんとか生きられると思うが、そもそも魔族という種族がどういう生態なのかわからない。

例えばオグル族。

彼らは真水でなくても、うつすらとした泥が漂った水でも平気で飲む。外見と同じく内臓も頑丈。毒に対する耐性も強く、液体であればなんでも消化できるそうだ。

小人族と共に暮らすようになり、綺麗な川の水を初めて飲み、それが「美味しい」という感覚なのだと知ったらしい。

逆にエルフ族は真水を苦手としている。ほんの少しでも魔素を帯びていない水は、飲めなくはないが「不味まずい」という。プロライトは長く旅をしていたので、真水を飲むことに抵抗はない。俺が鞆から取り出すボルさんの出汁だし——もとい、魔素水は濃厚な果実水のような甘さを感じるらしい。クレイたちリザードマン族は海水を飲料水としている。真水も飲めるが、海水も日常的に飲むことができる。

マデウスに住む種族は数えきれないほど多種多様。しかし、そのすべての種族において共通していることは、「水分を摂取しなければ死ぬ」ということ。

例外は神様や精霊などかな。

プリさんが食べ物や飲み物を摂取するのは、完全に娯楽。

精霊リベルアリナは、霊体であるため液体や固形物を摂取できない。

そう考えると、魔法を得意とし魔力に頼る魔族は、エルフ族に近いのかもしれないな。

エルフ族の隠れ里みたいに、美男美女がたくさんいるのだろうか。いや、意外とオグル族のような屈強な身体くつきょうの種族なのかもしれない。もしかしてタコみたいなエイリアンの容姿だったらどうするよ。写真撮りたい。

それはともかく水を探そう。山の近くには湖があると思う。火山活動で陥没した地に雨などが溜まるとカルデラ湖となる、はず。その湖の水が飲み水ではなくても、清潔けつせつの魔法でなんとかしやる。全身倦怠感けんたいかんに包まれて死ぬような羽目はめになるかもしれないが、飲み水は確保しよう。死ななければなんとかなる。

俺の常識がマデウスで通じるか不安ではあるが、行ってみないとはいまらない。

まずは何よりも、生きなければ。

トロブロ……トロブなんとか火山と言ったか。

近くで見ると、山の大きさがよくわかる。遠くから眺めても頂上とうじやうが雲に隠れて見えなかったくらいだ。俺の感覚で言えば、きっと富士山よりも高い。エベレストやK2のような、やたらと高い山

なのだろう。

「なんもねえな。せっかく外に出たってえのに、岩と砂ばかりじゃねえか」

俺の頭上うへでうねうねと蠢く鋼鉄イモムシは、つまらなそうにぼやく。

数百年ぶりに地下墳墓かたぐもから外に出て、大冒険が待っていると思いきやの乾いた大地だからな。ヘスタスの気持ちはわからなくもない。

俺としては新天地に來た緊張よりも喜びや興奮のほうが大きくて。

山の麓には、黒い木が生えていた。幹も枝も、真っ黒け。燃えたあとなのかと近づいて見てみれば、もともとが真っ黒なのだとわかる。枯れているように見えて、木肌に触れたらしっとりとしていた。

オゼリフ半島の王様の森ほどではないが、そこそこの太さのある黒い大木があちらこちらに。

葉が茂しげっていれば、空を隠すほどの立派な森だったに違いない。この木は初めから黒だったのか、何かがあって黒くなったのかはわからない。

調査先生に聞けばいいが、魔力が全身からこつそりとなくなる、死ぬほどの思いはなるべくしたくない。完全な無防備になるからな。魔法を使うにしても、まずは飲み水を作らないと。

灰色の曇天に走る稲光。赤茶色の大地とごつごつの溶岩。そこに真っ黒の木とくれば、ますます魔界まがいっぽいな。蝙蝠翼こうもりの悪魔が出てきたら叫ぶぞ。

「これ、食えねえの？」

黒い木の枝に飛び移ったヘスタスは、枝の上で跳ねながら木の感触を楽しむ。



「さすがに木は食えないと思うんだけど」

「お前、木の根っこは食ってたろ？ だったらこいつも食ってみろよ」

「木の根っこって、あれはゴボウっぽい山菜の一種だって。ベルカイムで売られているのを見た時は、なんで木の根っこ売っているのかと思ったけど」

「ほかに食えそうなもんあるか？ その岩はどうだ」

「岩を食えつか？ お前な、さすがの俺でも岩を食ったら腹壊すわ」

「虫いるぞ、虫。足が四十八本」

「絶対に嫌だ」

木の幹をカサコソと這う虫を見て、空腹も限界を超えたら食虫することになるのかと考え……いやいやいやいや、それはほんとに、絶体絶命の最終手段で、もう俺の思考が停止してからにしよう。原形を留めないくらいすり潰して団子状にしたら、いけなくもないかもしれない。うええ。

「ほかにお前が食えそうなもんあるか？ 頼むぜ？ お前がブツ倒れでもしやがったら、俺も共倒れなんだからな」

「はいはい」

鋼鉄イモムシであるヘスタスは、俺の身体から微かに漏れる魔力を吸収している。すかしつ屁ほどの魔力でも動けるように改造したので、ヘスタスは半永久的に動いていられる。

乾いた大地で何もないこの場所でも、わずかな魔素はあるのだろう。漂う魔素は湿気のように感じることはできないが、時々感じる生暖かい風。あれに魔素が混じっているような気がする。

ヘスタスがそれを吸収せずに俺の魔力を取り込んでいるのは、そっちのほうが効率が良いからだ。風は火山の裾野から吹いていた。

「ヘスタス、もう少し歩くぞ」

木の枝の上で飛び跳ねていた鋼鉄イモムシをわし掴み、重い足を動かす。

全身汗まみれ。筋肉痛は酷くなり、妙な眠気もある。できることならこの場で休んで、ひと眠りしたい。

だけどこんな見晴らしのいい、スッカスカの森の中で眠りこける馬鹿はいないだろう。と、クレイやプロライトに叱られそうな気がする。

魔法を使えない俺なんて、トルミ村の雑貨屋ジェロムのおっさんより貧弱だ。もしかしたら、村の子供たちより体力がないかもしれない。

魔力がないと俺の身体能力は激減するだろう。実際、今がまさにそうだ。

「青年」にもらった数々の恩恵という名の異能。それが使えないとなると、俺自身で生き延びないとならない。

マデウスに来てからの経験。クレイやプロライト、今まで出会った有能な冒険者の教え。トルミ村やベルカイムの奥様たちの豆知識。酒飲みたちのふとした愚痴。

それらすべてが俺を助ける力となる。

くだらない、つまらない、しょうもない知識が役に立つことだってあるんだ。

そんな数々の知識や経験を無駄にせず、自身の力として発揮する。それが営業職。

きつと、なんとかなる。

俺がこう思う時は、なんとかなってきた。

「お？ タケルよ、鳥が飛んでるぜ。あれ撃ち落とせねえの？」

胃袋をガツツリガツシリ掴まれたチーム蒼黒の団が、俺を放置したまま見捨てるなんてことは絶対にしない。

「おいおい、鳥なら食べるじゃねえか。なあなあ、聞いてんのかよ」

プニさんがいれば転移門を使わずどこにでも行けるかもしれないが、醬油の実を使った未公開料理はまだあるんだ。それを食うまで、あの食いしん坊たちは俺が必要なのは。

というか、頼むから俺のことを捜してくれ！

「おいっ！ 聞けやタケル！」

「ほっふ！」

耳元で叫ばれ、現実引き戻される。

俺の肩でがちやがちやと跳ねるヘスタスは、空を見上げると叫んだ。

「……鳥か？ あれ」

「鳥だろ？ 空を飛ぶのは鳥か飛竜だろ？」

はるか天空を旋回する、大きな鳥？ 鳥にしてはひよろつとしている。

「飛竜では……ないな。飛竜より小さい」

「どっちでもいいから、早く撃ち落とせ。逃げちまう」

「おいこら、魔法が使えない俺にどうやってあいつを撃ち落とせと？」

「岩を投げるとかしらよ」

「岩を投げてあれを撃ち落とせるのは、オグル族くらいだろう」

「使えねえなあ！」

「うるさいなあ！」

魔法を使えない俺を使えない呼ばわりするな！ そりゃ使えないけど、常識的にあんな空高くを飛んでいる鳥を撃ち落とすなんて真似……

「おっ？ 降りてくるぞ。撃ち落とせ」

鳥は旋回を続けると、突然ビタリと上空で停止。しばらくそのままいたと思ったら、まっすぐに降りてきた。

俺たちのほうへ向かって。

「え。何か獰猛な鳥だったりしたらどうするよ。どうするよ！」

「知らねえ。俺は逃げる」

「卑怯だぞヘスタス！」

「なんだとの野郎！ リザードマンの英雄、勇者、綺羅星と謳われたこの俺様に向かって、卑怯だ」と！

「痛あつ！ デコはやめろデコは！」

岩より硬い鋼鉄イモムシは、俺のデコを攻撃。全身を使ってデコで跳ね飛ばす跳ね飛ばす。

俺たちがくだらない喧嘩を続けている間に、鳥はどんどん近づいてきて。

「そうだヘスタス！ お前を投げる！」

「やーめる馬鹿ー!! ふざけんなヌケカス！ 眠気顔！」

ヘスタスをわし掴み、ピッチャー振りかぶって鋼鉄イモムシ球を……

「おお？ はぐれ民か？」

投げようとしたら、鳥が喋った。

いや、それは鳥ではなかった。

ヘスタスを握りしめたまま恐る恐る目を開けると、中空で停止したまま飛ぶ白いもの。

白い、もじやもじやした、何か。

「ずいぶんと集落から離れたな。どこへ行こうとしたんだ」

白い藁わらのような、もずくのような、もじやもじやした何かが喋っている。

黒い蝙蝠こうもりに似た翼をはためかせて。

なにこれ。

え。

なにこれ。

「え、あ、う、お」

白いもじやもじやの何かが、蝙蝠こうもりの翼で空を飛んでいるという状況が信じられなくて。

俺は口をばくばくとするだけで。

「日も暮れる。家に戻れ」

「い、あ、え、ほ」

「お前、ヴルカを被っていないから乾いたのだろう。何やっているんだ」

なかなか返答をしない俺をいぶかしむこともなく、白いもじやもじやは心配そうな声をして大地に降り立った。

そして、白いもじやもじやは両手を出して――

ああこれ、白いもじやもじやした何かは白い藁わらのような、ナマハゲが着ているケデのようなものを被っていただけなんだ。

「せめて頭だけでも隠すといい。呼吸が楽になる」

そう言っただけでも白いもじやもじやは頭部のもじやもじやを取り外し。

出てきたのは、白い肌はだに赤い目。

頬の一部がひび割れ、今にも剥はがれ落ちそう。

エルフ族に負けず劣らずの超、美形。

「どの集落から来たんだ？ 俺はハヴェルマのゼンダム。お前は？」  
へ。

おや？

ゼンダム。

ゼンダム？

どこかで聞いたことのあるような、ないような？

「おれ、お、おおお、俺」

「しっかりしろよ」

「おふつ、俺は、タケル、と、言います」

俺の握りしめた手からいつの間にか逃げたのか、ヘスタスが俺のうなじあたりでぼつりと呟く。

「油断すんなよ。もしかしたら、こいつが魔族なのかもしれないねえ」

渴いた喉に微かな唾を押し流す。

ヘスタスの言うことが本当ならば、この不健康そうな白い肌をした青年が、魔族。

いやに美形ではあるが、目の下は黒いクマがあるし、陥没かんぼつもしている。ひび割れた頬はこけて、飢えてるように見えた。

「タケルな。しばらくこれでも被っておけ」

「ふお！」

有無を言わず被らされた白いもじやもじや。

それはわずかに視界が確保されていた。ちくちくとした藁わらっぽい何かが肌を刺すが、次第に呼吸をするのが楽になった。

「タケル、これ、この白いやつ、魔素が出ている」

うなじから髪の毛の中に移動したヘスタスは、感心したように喜んだ。

魔素が出ているというより、この白いもじやもじや自体に魔力を感じる。なんらかの魔法で作ら

れたのか、それとも自然界にこんな白い藁わらのようなものが存在するのか。

ともかく、今ならばできる。

調査先生スキャン、必要最低限でいいので教えてください。

【フィカス・ゼングム 百七十六歳】

魔力を巧みに操る一族の末裔まつえい。種族は魔族と略されるが、古代カルフェ語で英知えいちを意味する「ユグル」と呼ばれることを好む。

鋼鉄都市ヴォズラオリーフにて、ギルディアス・クレイストンに恐れをなして逃げ出したと言われています。

忘れてた？

あ。

あ。

あーーーーー！！

そうだそうだった！

調査先生スキャン、さすがです！

ゼングム！ 確か、そうだった！ 聞いたことあった！

ドワーフの国、ヴォズラオを襲ったかなんだかしてクレイに追い払われただかなんだかした、